



**Data**

監督・製作・脚本: ジャファル・パナヒ

出演: ベーナズ・ジャファリ/ジャファル・パナヒ/マルズィエ・レザエイ

## 👁️👁️ みどころ

首つり自殺を自作自演し、その動画を SNS で公開。それだけでも人騒がせだが、それが個人宛に送られてくれば・・・？当局から映画製作を禁じられたイランのパナヒ監督が自ら出演し、「これは映画ではない！」と強弁する本作は、そんなショッキングなシーンから。

イランは広大な国。核の開発、米国との対立等々の政治状況も大変だが、男尊女卑のレベルもひどい。そんな中、原題を『3 FACES』、邦題を『ある女優の不在』とした本作のテーマは？

日本では競走馬の「種付け」は有名だが、本作で寓話のように登場する「種牛」の話は興味深い。パナヒ監督特有の皮肉やカムフラージュをかみしめながら、本来の狙いや、希望をしっかりと確認し、彼をはるか遠くからでも応援したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■イランvs米国に緊張！イランは映画大国だが・・・■□■

イランとイラクはどんな関係？シリアとエジプト、トルコは？また、アメリカはイランを北朝鮮と並んでヤバイ国と位置づけているが、それはなぜ？東洋の島国である日本に住む私たち日本人はそんな中東情勢にうといが、米国が2020年1月3日にイランのソレイマニ司令官を殺害したことによって一気に高まったイランvs米国の緊張は、目下世界最大の注目点だ。イランがウクライナの旅客機を誤ってミサイルで撃ち落としたことを認めたのは朗報だが、それを契機としてイランでは若者たちの反政府デモが広がっているから、ひょっとしてこれが政変クーデターにも・・・？

そんな心配（期待？）もあるが、他方でイランは映画大国だからその点にも注目！2017年の第89回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したのは、イランのアスガー・ファルハディ監督の『セールスマン』（16年）（『シネマ40』20頁）だ。同監督の『彼女が消えた浜辺』（09年）（『シネマ25』83頁）、『別離』（11年）（『シネマ28』68頁）、『ある過去の行方』（13年）（『シネマ33』113頁）は、すべてすばらしい映画だった。

そんな映画大国イランのもう一人の有名な映画監督が、アッパス・キアロスタミ監督の愛弟子であるジャファル・パナヒ。彼は2010年3月にイラン政府によって逮捕され、間もなく保釈されたものの自宅待機を強いられると共に20年間の映画製作禁止処分を受けている。ところが、そんな中でも彼は『人生タクシー』（15年）（『シネマ40』78頁）を発表し、同作が第65回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したからすごい。そんなパナヒ監督の最新作が本作だが、一体どうやって本作を監督し、発表できたの？

## ■この動画はホンモノ？なぜ私宛に？無視すべき？■

SNSが急激に発達している昨今、人気動画の再生回数は膨大な数になるそうだが、映画監督のパナヒ（ジャファル・パナヒ）を通じて自分宛に送られてきた動画を見てショックを受けているのは、イランの人気女優ベーナズ・ジャファリ（ベーナズ・ジャファリ）。本作は、冒頭に少女マルズィエ（マルズィエ・レザエイ）が自ら手にしたスマートフォンのカメラと向き合い、悲痛な面持ちで「私は昔からずっと映画が大好きで、ずっと女優を夢見てきました。寝る間も惜しんで勉強し、テヘランの芸術大学に合格した。でも、夢は砕け散った。」と語り始めるシークエンスからスタートする。続いて彼女は、①自分の家族らに裏切られ、女優への道を断たれたこと、②憧れの人気女優であるジャファリに、家族を説得してもらおうと何度もコンタクトを試みたが、その望みも叶わなかったこと、③そのため、人生に絶望した自分は自殺するしかないこと、を告白し、現にそれを実行した動画をジャファリ宛に送ってきたわけだ。

そんな動画を見て、誰もが最初に持つ疑問は、「この動画はホンモノ？」ということ。今時どっきりカメラ並みのインチキ動画がいくらでもあるから、ひょっとして、これは誰かのイタズラ？もしくはジャファリに対する何らかの嫌がらせ？そう思えなくもないが、それにしても、なぜそれが私宛に送られてきたの？そんなことをいろいろ考えても仕方ないから、この動画は無視すべき？

動画を見てショックを受けたジャファリは、結局マルズィエが本当に命を絶ったのかどうかを確かめるべく、パナヒの運転する車に乗って、彼女が住むイラン北西部のサラン村に向かうことになったが、それは当然の結論だろう。

## ■村の様子は？少女の存在感は？ホントに自殺したの？■

イランは北西でアゼルバイジャンとアルメニアと国境を接し、北にはカスピ海、北東に

はトルクメニスタンがある。そして、東はパキスタンとアフガニスタン、西はトルコとイラクに接し、南にはペルシア湾とオマーン湾が広がっている。その面積は1,648,000km<sup>2</sup>で、山が多いものの、中東で2番目、世界では第17位の大きな国だ。マルズィエが生まれ育ったサラン村がどこにあるのかは映画の中ではわからないが、そこに通じる細い道は、もちろん舗装などされていない、曲がりくねったもので、ちょっとミスしたら転落しかねないほど劣悪なもの。したがって、ここでは対面通行もできないため、ある地点でクラクションを鳴らして合図をするシステムがあるらしい。もちろん、前作の『人生タクシー』に続いて、運転手役でストーリーの牽引役となるパナヒはそんなことは知らないから、この村に向けて車を走らせる旅の中では、見ることも聞くこともすべてが珍しいものばかりだ。

サラン村までは小さな村が点在しているだけだから、マルズィエが首つり自殺をしたあの動画が本物なら、サラン村はもちろん、そこに向かう村でも、マルズィエの死を悼むようなイベントがされているはず。しかし、サラン村に到着し、村の墓地に赴いても、一向にそんな雰囲気はない。また、有名女優であるジャファリにサインを求めてきた村の人々にパナヒが「マルズィエを知ってますか？」と聞くと、1人の男が「あんたたち、あのバカ娘を捜しに来たのか？」と吐き捨てるように言い放ったから、どうやらマルズィエはこの村では異端児とみなされていたらしい。もっとも、そこで出会ったマルズィエの妹から、マルズィエの家まで案内してもらえたのはラッキー。ジャファリとパナヒがマルズィエの家に着くと、マルズィエの母親は「3日前から戻らないんです」と訴えるほか、やけに体格だけがいいが、いかにも粗暴そうな感じのマルズィエの弟は怒り心頭で荒れ狂っていたから、アレレ……。さらに、マルズィエと親しい、いとこのマエデーは彼女とは数日前にあったきりだと証言。マルズィエがホントに3日間も行方不明のままなら、やはりマルズィエはあの洞窟で死亡しているの？

## ■□■この洞窟は沖縄と同じ？ここなら自殺にピッタリだが■□■

私は2019年11月17日～19日に沖縄旅行に行き、南部戦跡巡りをした。そこで見学した洞窟が、旧海軍司令部壕と糸数アブチラガマの2ヶ所。旧海軍司令部壕は洞窟とはいえ、それなりの広さと明るさを持っていたが、糸数アブチラガマの方は、真っ暗な洞窟の中で、懐中電灯の明かり一つで進むもので、その劣悪さは想像を絶するものだった。

しかして、マルズィエが首つり自殺をしたサラン村の洞窟は、それと同じようなもの(?)だから、なるほど、ここなら首つり自殺にピッタリだ。ジャファリとパナヒはそう思いながら(?)動画の撮影場所と思われる洞窟を探検したが、そこにはマルズィエの遺体はおろか、首を吊ったロープもスマホも見当たらなかった。しかし、首を吊った枝らしきものはあったから、きっとここはあの撮影現場。すると、やっぱり、あの動画はインチキ……？

私の沖縄旅行での南部戦跡巡りは2019年10月31日に焼失した首里城の見学やひ

めゆり平和祈念資料館の見学と並ぶメイン観光だったが、ジャファリとパナヒにとっては、不安をいっぱい抱えた調査の旅。そして、彼らが訪れたのは沖縄と同じような洞窟だったが、そこでの成果は、私たちとジャファリたちの間には大きな違いがあったようだ。

## ■□■原題は？『3FACES』の意味は？■□■

本作の邦題は『ある女優の不在』だが、原題は『3 FACES』。しかし、本作に登場してくるのは、現在イランで大人気の女優ジャファリと、これから女優になることを夢見ている少女マルズィエの2人だけなのに、なぜ『3 FACES』なの？そう思っていると、サラン村のはずれには、イラン革命の後に演じることを禁じられた往年のスター女優シャルザードがひっそり暮らしていた。そして、実はマルズィエは密かに彼女のもとに身を寄せていたらしい。そんなマルズィエが調査に行き詰まっていたジャファリとパナヒの前にひょっこり姿を現すと、パナヒはともかく、ジャファリはヒステリックなまでに激怒したのは仕方ない。それに対して、マルズィエは「ここまでのウソをつかなければ、あなたはきっと来てくれなかったはずだ」と懸命の弁解を試みたが、それによってジャファリの怒りは静まるの？

他方、シャルザードが表舞台から姿を消し、2年前に流れ着いたこの村でも嫌がらせを受け、詩人、絵描きとして孤独な隠遁生活を送っているという話をマルズィエから聞かされたパナヒは、いたくシャルザードに同情。そして、シャルザードの詩の朗読を収録したCDを貰い、才能豊かな芸術家や未来ある若い女性が虐げられている理不尽な現実に触れる中、痛切な思いに駆られていったのは当然だ。その結果、車中で一夜を過ごしたパナヒは、翌朝マルズィエを家族のもとに送り届けることにしたが、この時点ではジャファリの怒りは収まっていたうえ、マルズィエの思いにも理解を示してきたらしい。そのため、ジャファリはマルズィエと家族の中を取り持つため、彼女と一緒に家の中へ入っていたが、さて、マルズィエとマルズィエの一家との和解は進むのだろうか？そしてまた、女優としての道を歩みたいマルズィエの思いは、何らかの形を成していくのだろうか？

それを考えると、更に本作ラストの何とも印象的なシークエンスを見れば、なるほど、パナヒ監督が本作を『3 FACES』としたことの意味がはっきり見えてくるはずだ。

## ■□■パナヒ監督の皮肉とカムフラージュをしっかりと受信！■□■

日本は経済大国の先進民主主義国であるにもかかわらず、男女平等の観点からはかなり劣っており、世界第121位だからひどい。スウェーデン、ノルウェー等の北欧諸国がトップ3を占めている。それでも、本作の至るところでパナヒ監督が皮肉いっばいに強調しているサラン村の男尊女卑ぶりに比べれば、日本はまだまだ。サラン村に通じている道路を塞いでいる「雄牛（種牛）」の話を知っていると、その種牛の精力絶倫ぶりと、その高収入ぶりの自慢がどこまで本当なのかはわからないが、イランにはそんな話が現実にある

ことにビックリ！本作では、影の主人公ともいうべき、女優を夢見ながら首つり自殺をせざるを得なかった（？）少女マルズィエの閉塞感がストーリーの出発点だが、バカでかい体格の弟の出来の悪さ、ダメさ加減を見ているとゾツとしてくる。さらに、村のじいさんたちが語る様々な言葉の中味は、男尊女卑の思想でいっぱい。先日観た、『一粒の麦 荻野吟子の生涯』（19年）では、明治の新しい時代が始まり、近代国家として歩み始めた日本でも、男尊女卑の思想が根強く残っていたことを痛感させられたが、イランのサラン村はそれよりさらに数世紀遅れていることは明らかだ。

しかし、当局から映画製作を禁じられているはずのパナヒ監督は、『人生タクシー』に続いて、どうして本作のような映画を作り、日本人の私とその映画を観ることができているの？本作を観ながら私はずっとそんな疑問を持ち続けていたが、それはどうやら彼が「これは映画ではない！」と、わかったようなわからないような屁理屈で当局をカムフラージュしているためらしい。もっとも『3 FACES』と題された本作の一つの顔となるべき、かつての大女優シャルザードの顔は本作には登場せず、その女優は不在のまま。しかし、シャルザードはパナヒ監督の要請に応じて自分の名前を使うことを快諾しただけでなく、映画の中で自分の詩を朗読することにも同意したそうだからすごい。いかに当局が映画監督のパナヒに圧力をかけ、映画製作を禁止しても、パナヒ監督は彼流の対抗手段を工夫し、皮肉とカムフラージュをいっぱい重ねながら「ある女優の不在」と今を生きる女優ジャファリの実態、そしてこれから女優として生きていくであろう少女マルズィエの実態を本作でアピールしたわけだ。

## ■ラストではパナヒ監督の狙いと希望をしっかりと受信！■

しかして、本作ラストは、あの曲がりくねった細い一本道をパナヒ監督の車が戻っていくシークエンスになる。すると、そこでは村のルール通り、対向車の有無を確認するためクラクションを鳴らす必要がある。運転手のパナヒがそれに従ったのは当然だが、同乗していたジャファリはそれに従わず、自分の足で自分の道を歩くと言わんばかりに車から出て、1人で歩いて行ったからアレレ……。さらに、しばらくは車の中に乗っていた将来の女優マルズィエも、ジャファリに続いて歩き始めたからさらにアレレ。

なるほど、車に乗っていくのなら村のルールやしきたりに従う必要があるが、自らの意思で歩いていくのなら自由で、「私の勝手でしょ」というわけだ。このラストシーンを見ると「荻野吟子」が女医の道を目指して険しく困難な道を歩んだのと同じように、今を生きている現役女優のジャファリはもちろん、冒頭で首つり自殺を試みていたマルズィエも、ラストでは自らの足でしっかり女優への道を歩み始めたことがよくわかる。本作ではそんなパナヒ監督の狙いと希望をしっかりと確認すると共に、パナヒ監督と『3 FACES』に対して大きな拍手を送りたい。

2020（令和2）年1月20日記